

実存としての日高先生

関 屋 光 彦

ラランドの哲学辞典によれば、「実存 *existence* とは、^い生き活きた、あるいは迫真力を有った実在のことであり、諸の抽象あるいは諸の理論と相対す」とある。そしてその項において、之につながるものとして、実存主義、実存哲学を挙げ、「その項参照」と記している。現代日本の思想的な用語として、「実存」という言葉は、その勝義において、大凡上記ラランドの解したように用いられているように思われる。

さて「日高先生」という人を、眼前において考える時、「ここに日高第四郎という一実存あり」ということには、まず異論はないであろう。

ところで上記ラランドの解説から推察されるように、真個の「実存」は生き生きとしていて容易に把握しがたく、概念的に規定しがたい。矛盾した諸契機を包蔵し、ヴァイタリティーに富み、状況に対応して多様な発現をなし、端倪^{げんい}しがたい。それ故凡庸な筆を以てしては、いまここにおかれたすぐれたる一実存——それは、掛値なしに、現代日本における一巨人たるを失わないのであるが——を、デッサンにもせよ、うまく描き出すことは、容易な業ではない。

私は、丁度カメラマンが眼前にある顕著な対象を前にして種々視点を変え何とか立体感とダイナミズムを以てその対象を再現しようと努力するそのように、私なりの手法を以て、何とかこの「人間——日高第四郎」を、幾つかの姿において、彷彿せしめたく思う。しかし、恐らくクラシカルな、いやむしろつたない私のやり方では、到底所期の目的を満足に果し得ないのではないかとおそれるのである。

論語の泰伯篇に次の一節がある。

曾子曰く「以て六尺の孤を託すべく、以て百里の命を寄すべく、大節

に臨んで奪うべからざるは、君子人か、君子人也。」

この叙述は、十全 *adequate* には、日高先生にあてはまらない。「百里の命を寄すべく」どころではない。すでに先生は敗戦後占領下とは言いながら、本来的には「千乗之国」乃至は「万乗」である日本の為政の要職に在って闘われた。新生日本の教育の下部構造に大切な、不朽の鉄骨を打込まれた一人である。故に「百里の命を寄すべく」では規模が小さくて、先生はその業績とを蔽い得ない。しかしこの曾子の言そのもの、その趣旨においては、手短かに先生の面目を示すものと言えよう。その第一句「以て六尺の孤を託すべく」は先生にふさわしいし、末尾の「大節に臨んで奪うべからず」とは、先生という実存の本質的契機の一つを示している。

しかし視点を少しく移し、わが国人、明治維新の先達の一人の言葉を藉り来る時、先生の姿は一層よく映じ出されるように思われる。

「命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るものなり。この仕末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり。去れ共、^{かよう}个様の人、凡俗の眼には見得られぬぞと申さるるに付、孟子に、『天下の広居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行、志を得れば民と之に由り、志を得ざれば独り其道を行、富貴も淫すること能わず、貧賤も移すこと能わず、威武も屈すること能わず』と云いしは、今仰せられし如きの人物にやと問いしかば、いかにも其の通り、道に立ちたる人ならでは彼の氣象は出ぬ也。」

(以上「南洲翁遺訓」の書、「遺訓」の篇に有り。上掲引用文は岩波文庫本該書、「第一、遺訓、第30節」に拠つた。)

上記南洲翁とその弟子との問答、それは奇しくも、前掲曾子の言葉よりも、はるかに十全に日高先生の面目を描き出しているように思う。私は相当長年月、日高先生に接して来た者のひとりであるが、先生の口からは、南洲翁に触れて語り出されたことの記憶はない。しかし翁の言葉また行蔵を、その「遺訓」その他により渉猟していると、同翁のいだいたイメージに当る人が明治百年後の今日の日本に現存している、との発見をなし、言

い知れぬ喜びを覚えるのである。

「日高先生ってどんな方ですか？」と人に問われたとする。その時わたくしは、即座に手短かに、先生について語る適切な言葉を見出すに苦心する——既述の如く、彼はすぐれたるそして大いなる実存なのだから。ややあって、上に記したように、先ずもって東洋乃至はわが国の典籍の中から、彼の風采を幾ばくか彷彿せしめる言葉を藉り来って説明するのが適當のように思われるのである。

さればとて、彼を純東洋的な、または旧来の純日本的な存在とのみ思うのは、錯覚であり、速断である。彼は第一にカント哲学の精神を生きて来られた人である。更に、西洋の学問を広く深く修められ、西欧ヒューマニズムの精神を体得しておられる方である。戦後、日本における民主主義教育の向上、発展、充実の為に、教育関係の実務を厭わず敢えて引受けて、多くの年月と労力を費されて尽瘁して来られたが、それはまさに如上の思想的基盤にもとづく。その御労苦は全く、「知る人ぞ知る」である。

しかしここに上記を以てしては、なお尽していない、そして欠かすことの出来ない一点があると思う。それは先生という実存のうちに核として存する「聖書に基づく神への信仰」、この一点である。先生はたしかに西欧ヒューマニズムの精神の体得者乃至は体现者であろう、また日本における民主主義の充実、向上の為めの貴重なる尽瘁者でもであろう。しかし同時に先生はイエスを主と仰ぎ、その古稀を超えてなお新鮮な若さを湛^{たた}えて居られる御生活の裡に、その生涯を言葉に依らず、その実践に於て、神の与え給う十字架を日夜担われて、ただこれ前進しておられる方と私は思うのである。

言辞拙く、到底好ましきデッサンたり得なかった。ただいささかでも、先生という実存の一端を描出し得たらば、とねがう者である。

(本学非常勤講師)